

指番号譜を使った指導によるアルトリコーダーへの 苦手意識の変化に関する一考察

水 谷 いつみ

はじめに

現在、日本の小学校・中学校・高等学校の音楽科の授業における器楽学習では、リコーダーが使用されている。小学校の音楽科の授業で使用されるのはソプラノリコーダーだが、中学校・高等学校ではアルトリコーダーが採用されている。つまり、入学したての中学校1年生にとって、リコーダーといえばソプラノリコーダーであるのに、突然、アルトリコーダーを演奏するよう強制されるのだ。このことに戸惑う生徒は多い。実際に、筆者が中学1年生に対する初めてのリコーダーの授業を行ったとき、「ソの指を押さえているのにドの音が出る。」「せっかく覚えていた指番号で逆に頭がこんがらがる。」といった声をあげている生徒は多かった。生徒がこのように感じるのも無理はない。小学3年生の時初めてリコーダーという楽器に触れ、演奏方法を習得してきたのだから、「リコーダーの吹き方はこうだ」という固定概念が無意識にあるのだ。かくして、中学1年生のリコーダー学習はネガティブな印象から始まってしまふ可能性が高いと考える。

本稿では、ソプラノリコーダーからアルトリコーダーへの移行の壁を可能な限り低くする方法として、駒形(2016)のリコーダーの指番号譜に関する研究をもとに実践授業を行い、アルトリコーダー導入時における指番号譜の使用が中学1年生の苦手意識に少しでも役に立つのか、本稿で検討する。

2. 事前調査

今回は鹿児島県錦江町立錦江中学校、南大隅町立根占中学校にて事前調査及び実践授業を行った。事前調査は1年生から3年生を対象に行ったが、実践授業を行い経過を観察するのは1年生のみである。まず、事前調査として1年生から3年生までにリコーダーへの苦手意識アンケートを行った。この時点で1年生はまだアルトリコーダーの学習を開始していない。質問、結果は以下の通りである。

キーワード：音楽教育、アルトリコーダー、中学校、音楽授業

- ① リコーダーを演奏することは好きですか (好き・ふつう・きらい)
- ② ①の答えの理由は何ですか
- ③ リコーダーを演奏するときに苦手だと思うことは何ですか (楽譜を読むこと・指番号を覚えること・強弱などの音楽表現をすること・なし・その他)

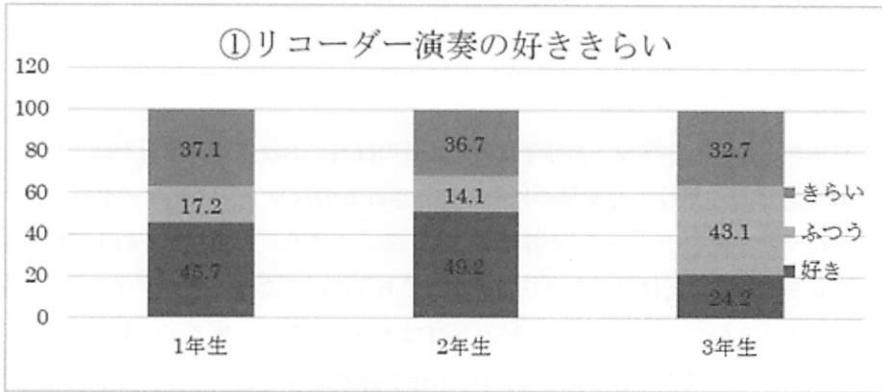


図1 各学年のリコーダー演奏の好ききらい

学年によりリコーダーへの意識の差があることがわかる。3年生で「好き」と答えた生徒は、24.2%と他の2学年に比べほぼ半分と目立って少ない代わりに、「ふつう」と答えた生徒が多かった。「きらい」と答えた生徒の割合は1年生が一番多いが、「好き」と答えた生徒も半数近くいる点から、必ずしもリコーダーが苦手な学年とはいえない。「ふつう」「きらい」と答えた生徒たちのリコーダーへのネガティブなイメージを払拭できるかどうかで、この学年のリコーダーへの取り組みが変わるといえる。

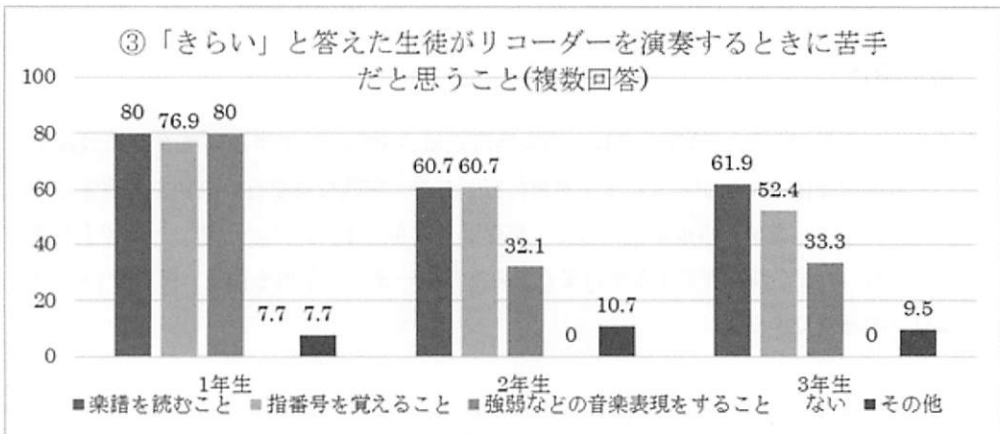


図2 リコーダーがきらいと答えた生徒が演奏するときに苦手だと感じていること

そこで、「きれい」と答えた生徒の理由に注目したい。各学年とも、楽譜を読むことと指番号を覚えることに苦手意識をもっていることが分かるが、1年生は、同時にリコーダーで音楽表現をすることも苦手と感じている。技術的にリコーダーが吹けないから嫌いというだけでなく、思い通りに表現をしてみたいのにできないという点も、リコーダーへのイメージをネガティブなものにしていることが分かる。

3. 先行研究

リコーダーを演奏する際、生徒は、①五線譜を読む、②指番号を確認する、③リコーダーの正しい位置に指を置く、④息を調節しながら吹く、というプロセスを経るが、駒形（2016）は、ギターフレット譜をヒントに以下のようなアルトリコーダーの指番号譜を考案した。指番号が書かれたバーを左から右へ並べた楽譜である。これにより、プロセス①と②を行うストレスが軽減され、生徒は③と④に集中することができる。これはリコーダーが苦手と感じる生徒にとってとても魅力的であり、演奏への意欲が向上することが期待できる。

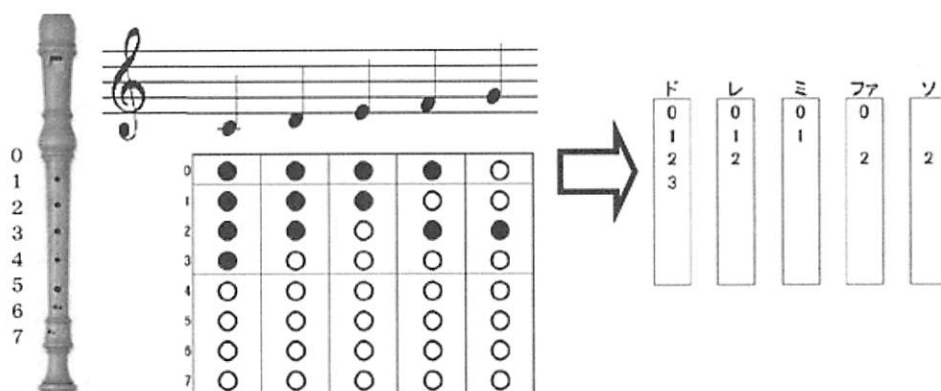


図3 指番号譜の見方¹

一方、指番号譜のデメリットも存在する。曲のリズムが分からないため生徒のリズム感に頼ってしまうことだ。上記の指番号譜は、全てのリズムが同じように並べられており、リズム感がないことでリコーダーを苦手とする生徒にとっては、音符では得られていた視覚的感覚も損なってしまう、逆効果になる可能性がある。それを解消する手立てとして、音符の長さに基づいて前のバーとの間隔をとり、より視覚的にリズムを捉えられるようにした。今回の実践で

¹ 駒形 加奈子（2016）「楽譜を読むことができない生徒が主体的に取り組めるリコーダー指導—指番号譜の開発をとおして—」『教育実践研究』第26集 p.109-114 より

A	ミ 0 1	ミ 0 1	ソ 2	ソ 2	ソ 2	ソ 2	ミ 0 1	レ 0 1 2	ド 0 1 2 3	ド 0 1 2 3	レ 0 1 2	ミ 0 1	ミ 0 1	レ 0 1 2	レ 0 1 2
A'	ミ 0 1	ミ 0 1	ソ 2	ソ 2	ソ 2	ソ 2	ミ 0 1	レ 0 1 2	ド 0 1 2 3	ド 0 1 2 3	レ 0 1 2	ミ 0 1	レ 0 1 2	ド 0 1 2 3	ド 0 1 2 3

譜例1 喜びの歌²

は、バー1つを1拍とし、2拍の音符は1つ分のバーを空け、3拍の音符は2つ分のバーを空けた。さらに、生徒同士の協力を促すため、音楽経験がありリズム感のある生徒と、あまり音楽が得意でない生徒でペアを組み、新曲の音取りから合奏まで、全てペアでの活動とした。

4. 実践方法

実践授業の対象は、まだアルトリコーダーへの固定概念が少ないと思われる1年生であり、計4時間の実践授業での学習の様子を観察する。また、実践授業後、リコーダーに関するアンケートを再度行い、事前アンケートからの変化をみることで効果を分析をする。

器楽演奏は、「演奏できるようになる」技能面も大事だが、「自分なりに工夫して表現できるようになる」創意工夫面によっても、演奏の楽しさが得られる。事前調査で明らかになったが、リコーダーが苦手な生徒ほど「演奏できるようになる」ことに意識が向けられていることも問題ではないだろうか。そのため、今回の実践では、指番号譜によってできるだけ早く「演奏できるように」なり、アルトリコーダーによって「自分なりに工夫して表現できるように」なることを目標とする。

指導計画と使う指番号譜は以下の通りである。

² 駒形 加奈子 (2016)「楽譜を読むことができない生徒が主体的に取り組めるリコーダー指導—指番号譜の開発をとおして—」『教育実践研究』第26集 p.109-114 より

表1 指導計画 (全4時間)

時間	学習内容
1時間目	・指番号譜の導入 ・「オーラ・リー」の練習 (A 1・A 2)
2時間目	・ペアで合奏の練習
3時間目	・アルトリコーダーの表現方法の学習 ・ペアで表現を考えて練習
4時間目	・ペアで練習 ・発表

オーラ・リー 指番号譜

A1

Diagram for A1 showing fingerings for notes 0, 1, 2, and 3. Each note is shown in a box with its finger numbers (0, 1, 2, 3) and a corresponding symbol (フ, ミ, レ, シ).

A2

Diagram for A2 showing fingerings for notes 0, 1, 2, and 3. Each note is shown in a box with its finger numbers (0, 1, 2, 3) and a corresponding symbol (フ, ミ, レ, シ).

譜例2 オーラ・リー指番号譜

3時間目のアルトリコーダーの表現方法の学習では、以下のプリントをつかう。まず教師がアルトリコーダーでいくつかの吹き方を範奏し、生徒はそれを真似して吹いてみて、どのように吹いてみたかのかを書き込む。次に、伴奏をCDで3パターン流し、聴いた感じを書きこみ、それぞれの伴奏にはどのようなアルトリコーダーの吹き方が合うか、ペアで話し合う。最後に、3パターンの伴奏に合わせ、変化をつけて演奏できるように練習をする。

5. 実践結果

生徒たちははじめ指番号譜に戸惑っていたが、時間を重ねるごとに慣れてきたようだった。音取りは比較的早くできたようで、リコーダーは苦手だと言っていた生徒も、「これならできるかも」と熱心に練習していたのが印象的だった。3時間目の表現方法の授業では、教師の真似をして吹かせるとどのクラスの生徒も楽しそうに吹いていて、伴奏と演奏表現の組み合わせもそれぞれ多彩であった。

オーラ・ラーの練習をしよう

1年()組()番()名()

音楽によって演奏方法をどう変えられるか自分たちで考えてみよう

方法

① リコーダーの吹き方で聞こえる感じが変わることを見つける

(吹き方1
吹き方2
吹き方3)

② 3種類の伴奏を聴いて、それぞれの特徴をつかんで右の四角の空欄に書きこむ

③ 伴奏のイメージに合わせてどう吹きたいか考えて、右の四角の空欄に書きこむ(吹きたかった吹き方や、強弱など)

④ ペアでどう演奏するか話し合ってから右の小さな楽器の上に書きこむ

⑤ 練習する

001

002

003

図4 授業プリント (第3時間目)

しかし、反省点がいくつかある。まず、指番号譜の各段の最後に休符の印を入れていなかったことによって、次の段に移動する際に相手と合わなくなってしまったり、最後の音符の長さが曖昧になってしまったりしたことだ。次に、それぞれのパートが吹けていても、合わせるときにタイミングがずれてしまい、合わないイライラによってやる気が削がれてしまったペアがあったことだ。合わせることが難しい生徒への声掛けを先に考えておかなければならなかった。また、やりがいを感じながら集中して活動しているペアがいた一方、2人で合わせて吹けないことから、活動に集中できずどうしていいかわからず戸惑っていたペアもあった。

リコーダーに対する意識の変化を、事前アンケートと実践後に行ったアンケートで比較した。

表2 アルトリコーダーの好ききらいの変化

	実践前	実践後
好き	45.7%	59.6%
ふつう	17.1%	1.8%
きらい	37.1%	38.6%

アルトリコーダーが好きだと答えた生徒が13.9%増加し、予想以上の効果が出た。教科書の楽譜と指番号譜のどちらが使いやすいか、という質問に対しては、「教科書」が28.3%、「指番号譜」が67.9%、「どちらも」が3.8%と、指番号譜を好む生徒が多くいた。「きらい」と答えた生徒の数があまり変わらないのに対し、「ふつう」と答えた生徒が大幅に減り、「好き」と答えた生徒が増えた。このことから、指番号譜のリコーダーが苦手な生徒への効果は薄いですが、ふつう程度にリコーダーが好きな生徒には効果があるといえる。ただし、リコーダー演奏が好きであると答えた生徒のうち、32.4%とほぼ3分の1の生徒が、教科書の方が分かりやすいと答えている。音楽経験がある生徒は五線譜に慣れているため逆に見にくく、リズムや強弱が分からないと感じていた。

6. 今後の展望

指番号譜については、以下の点について改善の余地がある。

- ・慣れるまでは五線譜の方がいいと感じる生徒が多い。
- ・パートごとに分かれた楽譜なので合奏をするときに合わせにくい。
- ・細かいリズムが出てくる曲は音取りが難しい。

また、五線譜と指番号譜はそれぞれのメリットとデメリットがあるため、今後はこの二つを併用していく方法を検討したいと考える。

参考文献

- 駒形 加奈子 (2016)「楽譜を読むことができない生徒が主体的に取り組めるリコーダー指導—指番号譜の開発をととして—」『教育実践研究』第26集 p.109-114
 教育出版 (2016)『音楽のおくりもの 中学器楽』